

(第31回) 音楽鑑賞会**～紀尾井ホール室内管弦楽団第116回定期演奏会～**

4月5日すっかり暖かくなり“春うらら”の黄昏時、春風に吹かれて桜吹雪が舞い始めた中を紀尾井ホールに向かう。

第31回の「音楽鑑賞会」は日本製鉄文化財団運営の紀尾井ホール室内管弦楽団の第116回定期演奏会である。今回のプログラムはモーツァルト(1756～1791)作曲の3作品であり、それぞれ楽器編成が異なる個性的な作風の聴き分けが興味深いところである。

・指揮、ヴァイオリン：ライナー・ホーネック(1961オーストリア生まれ)

7歳でヴァイオリンを学び始め、1981年に第1ヴァイオリン奏者としてウィーンフィルに入団、1992年から同コンサートマスター、ソリスト・室内楽奏者並びに指揮者として世界各地で活躍中。2017年4月から紀尾井ホール室内管弦楽団の首席指揮者



指揮・ヴァイオリン ライナー・ホーネック

・コンサートマスター/ヴァイオリン：玉井菜採(1972年京都生まれ)

桐朋学園大学卒業、ミュンヘン音楽大学に学ぶ、数々の国際コンクールに入賞、ソリスト・室内楽奏者として国内外で活躍中。東京藝術大学教授

解説書に沿ってプログラムを紹介する。

(I) セレナーデ第6番二長調KV239「セレナータ・ノットゥルナ」(1～3楽章)

19歳で作曲された個性的な作品。弦楽団を背景に弦楽4重奏(ヴァイオリン2:ホーネック・玉井、ヴィオラ:市坪俊彦、コントラバス:池松宏)が中央で立って演奏する美しく繊細な弦楽合奏とティンパニが対峙して醸し出す独特なハーモニーを聴かせる“知られざる”佳曲である。

(II) 交響曲第25番ト短調KV183(1～4楽章)

17歳で作曲された作品で短調による交響曲は後の第40番KV550とこの2作品だけである。オーボエがリードする弦楽合奏と4本のホルンを揃えた管楽合奏の響きが拮抗するハーモニーが哀調を帯びて美しい。

(III) セレナーデ第10番変ロ長調KV361「グラン・パルティータ」(1～7楽章)

30歳前後にウィーンで作曲された作品。ファゴット、クラリネット、オーボエ、トランペット、ホルン、バセットホルンを各2本とコントラバス1本と言う異例の13音声部を擁する大作である。ファゴットとクラリネットがユニゾンで交互にリードする管楽合奏をコントラバスが低音部をしっかりと支えるユニークな響きは初めて聴く驚きであった。演奏が終了し万雷の拍手の中でホーネックが13人ひとりひとりと熱い握手を交わし晴れやかな笑顔で退場したフィナーレは感動的であった。

モーツァルトを知悉し敬愛するホーネックの時に華やかな、時に静謐な感性豊かなタクトとヴァイオリンの好リードで導かれる紀尾井ホール室内管弦楽団の素晴らしい演奏によりモーツァルトのまさにユニークな作品の世界に誘われ、心和む余韻に浸りながら家路に就いた。

なお、今回4月5日～6日の会員、ご家族のご参加は29名様でした。ありがとうございました。

(内田俊介・記)